

# 山と博物館

第13巻 第4号 1968年4月25日

大町山岳博物館



## 新任のご挨拶

市立大町山岳博物館長に四月十日付で補せられましたので、ご挨拶を申し上げ、皆様のご叱正とご協力をお願い申し上げます。

博物館は大町市の東方鷹狩山の中腹に位置し市街を一望のもとに見おろし、はるか西方には北アルプス連峯を望み、位置、環境とも最適といえます。市地街よりみた当館は大町市のシンボルであり、観光開発の一端をもなっております。

ここで飼育研究されている動物や植物などと豊富な陳列品は訪れる観客の目をみはらせております。特に、カモシカと雷鳥の生態研究は特色をもっており、ひろく外国からも照会を受けております。

一方当館の職員は日夜黙々と山に湖に特殊な研究のために精励致しており、山岳博物館の面目を発揮すべく努力いたしております。

近來、県下各地にもその地方の特色をいかして博物館が開設されておりますが、当館はあくまでも開設当時から特色を充分生かし、なお、観光面ともタイアップし、訪れる方々のものとしての博物館運営に努力したいと考えております。

また、当館運営にあたり数多くの人達から多大なご協力とご助力をいただいておりますが、何卒今後ともどしどしご叱正をいただき、特色ある山岳博物館発展のためご協力あらんことをお願いいたしまして、着任のご挨拶といたします。

【大町山岳博物館長・関益雄】

# 早春の小鳥日記

長沢修介

2月×日

早朝、出勤途上にキレンジャクの大群を見る。ヒリヒリ／＼の声は遠くからそれと解り自転車を止め、近寄って見ると、約一〇〇羽の群、朝の飛び立ち前か、朝食をすました後の一時か、一本の大木に鈴なりに群がって体をふくらしまっている。北へ帰る日も間近く、春を歌える日ももうすぐだ。

朝日を受けて頭上の羽冠が美しく、尾の先

キレンジャク



の鮮黄色が光って見えた。

2月×日

二月終りだ、例年なら日だまりにオオイスノフグリの小さな青い花を見る頃であるが、今年はまだ／＼白一色の世界、春の来るのは一体いつのことだろう。

ムクドリが四羽、体を寄せ合うようにふくらんで止まっている。まだ巣の争奪戦はやっていないが、あの止っている木には毎年二番が営巣する、寒さの中でも春の近いことは本能的に知っているのだからか。

3月×日

今日は朝からくっきりと晴れて、日射しも春らしい感じだ。

午前一〇時、きり／＼、きり／＼とコカワラヒワが上空を飛ぶ、秋のように群でなく、二羽あるいは三羽の少群だ、昨年は二月中旬に見たのが今年は三月初旬とは、春もだいぶ遅れている。北アルプスの稜線は雪煙を立てて、青空にくっきりと真白い姿をそびえ立っている。

3月×日

昨夜の雨で道がすっかりぬかるみになってしまった。雪どけの小川は泥水をまじえてにごっているが、小川のふちのヤナギの芽が大きくなくなった日当りの良い所のは帽子をぬぎ始めている。この小川づたいにキセキレイの飛んで来るのも、もうすぐだ、ツグミが一羽、クアッと鳴いて飛び去った。

3月×日

通りすがりの垣根の下に青い小さなオオイスノフグりをみつけた。この小さな花の咲くのをどんなに待ったことか、まだ完全とはいえないが確実に春の来たことを知った喜びは大きく、雀の声にも急に春を感じ、大声で歌いたくなった。明日はカメラをかついで、南へ行ってみよう。きつともっと沢山の春にめぐりあえるかも知れない。

3月×日

昨日の期待は見事に裏切られた。

朝から小雪の舞う寒い天気、昼頃より本格的な雪となり、午後になって気温は少し上ったものの夕刻までに二十センチも積る、カシラダカ一羽チ、チと淋しげに枝上にまるまって鳴く。

3月×日

春の天気はどうしてこう気まぐれだろう。昨日と違って、今日は朝からぼ／＼と上天気、朝から雀の声がにぎやかだ。

午前中森へ出掛る、コカワラヒワがキリキリ、ビニーンを始めた。

昨日は一羽でしかみなかったカシラダカが、今日は三十羽位の群で三三五五思い思いの枝で小声で嘯りを始めている、まだ大声にならずほんのつぶやきの程度だ。

遠くホホジロが一羽、嘯りの練習に余念がない、「チヨビツ、チチ、チヨビツ、チチどうもうまくいかねえ、冬が長かったせいで昨年の様にリズムののってこない、もう一度、チヨビ、チヨビツツツ、この調子じゃ昨年の巣を作ったあの良い場所を誰かに鳴きまけで取られてしまうぞ、

「チヨビ、チヨビツツ」日陰には多くの汚れた雪は残っていれど夏鳥の渡来はすぐだ。

3月×日

朝、キセキレイの声で目ざめる。

この鳥は毎年にぎやかにやってくる、小川づたいにチチン、チチン、チチン、チチン、チチンと大声で鳴きながら、「今年もやって来たぞ」

といったげにやって来る。一度やっていると、大きな尾を振りながら、終日大声をはりあげて田圃や小川を飛びあさる。昨日の巣の上に今年も積み重ねて巣を作るであらう、午後ヒバリのヒルルを聞く、キセキレイとは全く対称的にヒバリの方はそつとやってくる。

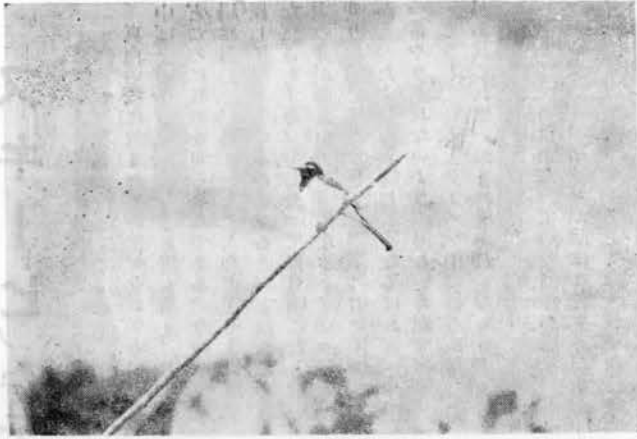
いるかいないかわからない位にそつとやって来るが一日目には二声くらいしか聞けなかったと思っても、以後毎日現れ、一週間もすると嘯り始める。夕刻ハンボソガラスが二羽、仲よくねぐらを目指して帰るを見送る。

3月×日

早出勤途上ヒバリの嘯りを聞く、立止って時計をみる、五秒から十秒、まだ／＼鳴き始めである、今日は朝から良い事があるぞと期待して出勤すると、昼頃イワツバメの声を聞く、昼休み屋上に登ってみる、三羽、確実に来た、まだ昨年の巣の所へは寄らないが、上空をあらち飛び回っている。

今日来たこの鳥は本州南部で冬を越したものであるうか、どちらにしても海を渡り山を越えて帰って来たイワツバメは、疲れた様子もみせず大空を自由に飛び廻っていた、昨年の状態と変わっているかどうか調べているかも知れない、近年大田市の中にもイワツバメがほとんどで、ツバメの数はめっきり少なくなりました。一つには近代建築という文明がツバメの営巣する場所を奪ってしまったという反面イワツバメには良い営巣場所を作ったやっつたようである。又イワツバメが集団営巣するようになると附近からツバメの姿が消えてしまうのは何故だろうか。

イワツバメの集団営巣、毎年問題となるダニのことは、毎年新しい所に巣作りさせるように心がければ或る程度解決できるのでないか、昨年の古巣へ又今年もかけるようなことをすると自然とダニも多くなるといふのも古巣は秋のうちか、渡来前に落ちておくと毎年新しい所へ新しい材料でかけるので



虫のつく率もずっと少なくなるのではないだろうか、又出入口の糞の問題などちょっとした糞受けを作たらどうかだろうか、ともかくはる／＼南方からやってくる小鳥を可愛がって心豊かな生活をしたものだ、イワツバメがやってきたから間もなくツバメも姿を見せるだろう。毎年イワツバメが来てから一週間のうちにツバメもやって来る。

4月×日

午後山仲間を迎えに木崎湖へ、木崎湖北端はまだ春浅しの感じ、フキノトウが一面に芽を出した所、残雪も所々にあり、湖面を渡る風は冷い、風にのってカルガモの音がガー、ガーと聞える、木々の芽吹きもまだで柳の木のみが白く咲いていた。

ウグイスが一声、短くケエキヨ、まだ本当の嘔りには間がありそうだ、

湖畔の雑木林にカシラダカが大群で嘔っている

セグロセキレイ

る、ヒバリの嘔りに似て複雑であるが集団でこのように嘔っていると、かしましい感じを受けられないでもない。

セグロセキレイが一羽すっかり春の装いで胸を張り大声で嘔っている。長かった欠乏の冬をこの湖畔で細々と越し、やっと胸を張って歌える春が来たのを全身で受けとめて味っているようであった。

夕刻、山から山仲間が十余名ぞろ／＼と下ってくる、新しい人達は疲れた感じ、古参者は残雪の尾根のすばらしい眺めを、又岩尾根の眺めを目を輝かせて語る、或る者は福寿草をいかかえも抱いて、「畔一面に咲いてたよあまりきれいだっただで一株もらって来た」という、美しさを自分の手の中に入れて箱庭の美しさとして眺めずとも、野生のままの美しさを観る心をもっと養いたいものだ。

野生の福寿草は彼らの手によって箱庭の福寿草となってしまふ。

雑木林にウソの声を聞く、ヒウー、フーと静かに鳴いているこの鳥ももうすぐ山に入ってしまうだろう、

大半は帰ってしまったのか湖面にうかぶカモの姿は少なく、時折カルガモの声のみがむん／＼しく風に流れていた。

4月×日

山岳指導員の検定会で戸隠へ

大町は桜のツボミが硬いというのに長野はもうアンズが満開で、戸隠に着いたらまだ残雪が多く家々の裏には一米を越す所もある。

一日のうちに春と冬の間を行ったり来たりした感じで戸惑う。

奥社への道はまだ一面の雪で一米以上もあるうか、自動車道は除雪してあるので、すっかり乾いており、マイカー族が乗り入って、砂ぼこりを浴せる、奥社の参道は雪の中でここまでマイカー族も入らぬと思たら、ミニスカートでハイヒールのお嬢さんが思い切り良くさく／＼とくるぶしまでつもりながら奥社へ入って行くのには驚かされた。

まだ夏鳥の姿は何処にも見えなかったが、ヒガラの嘔りが盛んで時折ウグイスの短い声が聞えた、残雪期の時のみに聞かれるゴジュウカラのフィー、フィーは大声で、声から想像したらもっと大型の鳩位のを思いうかべるが、小形の彼は丈夫な足を充分に生かし、木の幹を上下自由に歩きまわっては虫をついばみ、よくのどがつぶれないと思われる程大声でフィー、フィーをやっていた。遠くキツツキのカラカラ木を打つ音が聞え残雪期の山は鳥達がまず春を告げていた。

ヒガラが嘔りながら目の前の小枝にまで寄って来て、頭の毛を立てて黒曜石のような輝いた黒い瞳で、小首をかしげながら侵入者の私をとがめるようにみつめていた。カメラを下下げればよかったと思ったがすでに後の祭りであった。

五月のこの参道は、小鳥の楽園であるのに、今は数種の鳥で春は歌われていた。

翌朝宿でアオジの嘔りを聞く

ジョビンチロロと始まるが最後まで鳴きとらさない、

まだこれも嘔り始めといったところか、中社でクロツグミがケロコ、ケロコと下手な嘔りを始めたがこれもまだ本調子でないようだ。

インド辺りの暖い国から帰って来て、この雪の中では十分な食物もないだろうから疲れも充分にとれないのでうまく嘔れないのかも知れない。

宿の前の生垣でミソサザイがひときわ大きく嘔りを始めたいつものながらこのミソサザイの美しい音色には感心する、ミソサザイは藪から藪へチッチと鳴いて飛ぶものとはか



り思っていたら、あんなに美しい声で嘔るとは知らなかった」と同行の山仲間がもらしていた。

きびしい岩登りや風雪の山歩きもあるが、もっと自然を知り、愛する心も山登りには必要ではないだろうか、山登りにも幾つもの肉付けをもつて登ると山自体の味い方が変わってくるのではないかと思う。

もう一ヶ月もしたらここは小鳥の声で朝から夕までいっぱいになるだろう、その時にも一度来てこれらの鳥の美しい嘔りを聞こうと心に決めて車に乗った。

アオジ

【山岳博物館調査員】



# スキーヒツテ雑記

松沢寿子

真白い雪に包まれていたゲレンデも、四月中ばを過ぎる頃となると雪も消え、ところどころに残雪を見るのみである。今のスキー場は淋しく、時々一人二人物ずきそうに雪を探して滑っているのを見ると何となくあわれな気ええする。少したつて五月頃になり若い木の芽が萌え出す頃になると、ぐっと趣が変り、残雪は生き／＼と輝いて、山全体が生きかえったように素晴らしい時期である。今が一番やりきれないように淋しい時期である。こうしているとシーズン中のいろんなことがあれこれ思い出され懐かしくもある。

十二月二十九日

クリスマス以来入っていた団体が帰り、ホッと一息つく、高校生の団体は先生方がまとめて下さるので、私共としては大変楽な団体である。今年で二年目の高校であるが、気持ちよく満足して帰ってくれたようなので、安心して。手伝いの学生もなれない為か少し疲れ気味、今日が一番ひまな時なので早く休むように云うが休もうとしない。疲れた時は睡眠が一番と思うが、若い彼女らには通用しないらしい。従業員も順調にそろってくれた。雪も沢山積ってくれた。明日から又戦争のような毎日が続く、今日は出来るだけ眠っておきたい。

一月四日

年末から入っていたお客様は今日ほとんど帰る。新しい人と入れかわるので、あまり人数は変わらないけれど、正月三ヶ日が過ぎたというだけで一安心、救われたような気分を味わう。

一月二十日

不帰の皷が青空にくっきりと美しい、いつも調理室から見えるあの稜線を美しいと思う。鋭く切れたような凹凸の線は人を寄せつけぬように厳しい、それ故に限りない魅力をも

感じるのであらうか。

「ヤッチャッタ／＼早く早く」スキー教室へ三日程通っている学生が、大声をあげて帰ってきた。何事かと思いきやズボンの股が三センチ近くも破れている。

「おぼちゃん僕タイツはいていたからよかったです。」さっそく縫ってはかせる、こういうことは度々ある、男性の場合はまあ／＼として女性の時は大変、スタイルを考え下は何もはいていない人がいるとか、いつどこで転び破れるか分からないこと故、ズボンと同色のタイツなり下着なり着用していただきたいもの。女性にかぎらず男性も万一を考えて、針と糸を持ってもらえば最高と思う。

二月十五日

先日の連休に主人が腕をけがする。心配したが打撲だけということ、あと十日もすればよいらしい。

掃除に行っていた女の子が不満をもらす。「いやだなあ、あの人達、男の人が女の子の髪の毛といてやっているのよ。」と、この頃一般に男性が女性化し、女性が強くなったとよくいわれれているが、スキー客にもその点が顕著に現われているのを見かける。

若い男女のグループではほとんどがそうで、レディはすべてに優先されているようだ。主人は保守的な方なのでこれをきらい「何だあのさまは」なんていって私の方へあたり散らす。しかし、あまり行きすぎで不健康にならないかぎり、これは大変よいことだと思う。戦後の社会教育をうけた十代、二十代の若者には、レディファーストは少し

も不自然でなく、自然な型となってとり入れられているのであろう。私共は、これをあたたかい眼で見守ってやりたいもの。夜のまどいの一時を暖かいホールに集まって、ギターを弾きながら歌う男女のうた声には、老いも若きも皆一緒に楽しみたいという無言のムードがあって、宿泊者全員がいつの間にか仲のよい友達になっている。

三月十日

この頃のお客様はほとんど学生ばかり、食欲も大変なもので、時々お釜が知らない間に空っぽになりあわてさせられる。

激しい運動をするスキーには何とんでもなくても、激しい運動をするスキーには何とんでもなくても、その点あれこれ考え、とに角夕食の主要となるものには肉をあてることにした。経費がかかりすぎる点ではどうしても無理をせざるを得ない、疲れきった体に要求されるものは動物性蛋白質をおいてないと思ひ、その線を守ることにしている。食事の要点は、主菜にポリニウムをもたせ、次に生野菜をたっぷり味のきつい漬物や山菜をちよびりという型をとってあげば、スキーヤーに受けること間違いなし。今シーズンで私共も四シーズンでスキー場を過ぎたことになる。末だ未だ浅



い経験ではあるけれど、少しづつでもよい方へ向って登り続けていきたい。  
(白馬ベルグハウス)

## 博物館だより

### 人事異動

四月十日付で人事異動があり、新館長に岡益雄氏(前大町病院事務長)が、庶務係には黒田明夫氏(前大町小学校庶務係)飼育係に帯刀千仁氏(前大町常盤小学校用務員)がそれぞれ着任した。

前館長成沢祥人氏は消防署へ、勝野直久氏は税務課、荒井幸亀氏は総務課へそれぞれ転出した。

### 訂正

第13巻2号表紙説明「コチドリ」は「イカルチドリ」の誤りにつき訂正し、お詫びいたします。

### 表紙説明

翁ガ岳早春

画 斎 藤 清

山と博物館 第13巻第4号

一九六八年 四月二十五日発行

発行所 長野県大町市T.L.L大町②〇二二

大町山岳博物館

印刷所 大町市下仲町

大糸タイムス印刷部

定価 年額 三〇〇円 (送料共)